

メジロマックイーンと俺

おれ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

メジロマックイーンを中心とするメジロ家との長年の付き合いの話。

21／9／21 感想を受けて8話の内容を大きく修正することになりました。現時点で9話まで読んでくださった方々は修正版の8話からまた読んでいただけると幸いです。 m () m

8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話
※修正版							
26	23	18	15	11	8	4	1

目次

1話

「あっちい、い、」

夏の暑さのせいで思わず口からそんな言葉が出てくる。今は8月。夏休みも中ごろに差し迫った時におれは虫取りをしていた。近くに
ある木陰に入り、水筒を一口。ふと虫かごの中を見てみると、現在の
収穫はたったのセミ一匹のみだった。お母さんが買ってくれた麦わ
ら帽子を深く被り、まだ見ぬ虫を追い求めまた走り出した。

意気揚々と走り出して数分、すでにバテてしまっていたおれはだら
だらと汗を流し歩いてきた。とぼとぼ歩いていると目の前に大きな
塀が見える。たしかここは町一番の豪邸だったと覚えていたおれは、
もしかしてこの中にはスゴイ虫がいるのではないのか？ と中に侵
入するために塀をよじ登り始めた。友達のケンちゃんがおれのこと
を木登り名人と言うほどおれにとって塀ですら登るのは簡単なこと
で、するすると登っていった。林の中に無事着地したおれは落ち葉を
踏みしめるようにして歩いていた。

「だめだあ、みつかんねえ、い、」

数十分探し続けた末、ついに見つけることができなかつたおれは近
くの原っぱの木陰でふて寝することにした。気持ちがいいのでどん
どん意識がとろけていつている所に、君、と声をかけられたことでめ
が覚めた。ばつ、と素早く体を起こし、ファイティングポーズを取っ
たおれは声の主を見た。

「こんなところで何してるの？」

短い髪や、ジャージを着ていることなど様々な特徴のある中、一際目立つのが耳が自分とは違い、頭についていることだった。そこで少女はいわゆるウマ娘というものと気づいた。とは言っても今のおれは勝手に入ったことに関しての言い訳を考えるのに頭がいっぱいいっぱいだった。

「昼寝をするのに良さそうな原っぱがあったから、、、つい。な？」
「ふーん？」

少女はおれの苦し紛れの言い訳に対して、怪訝そうな顔をしてこちらを見つめてくる。あまりにも見つめてくるものだから、この空気を變えるべくおれは動くことにした。

「き、君の名前はなんていうのかなあ〜？」

「普通、不法侵入してきたヒトには名前なんて教えないものだよ」

正論を言われてしまったおれは聞こえないフリをして、無理矢理すすめることにした。

「お、おれはー！ 中田って言うんだ！ よろしくー！」

「ま、ばかつぽいし、何かに悪用もできそうにないか。私はメジロライアン。よろしくね」

おれが差し出した右手は掴まなくて名前だけを教えてくれた。小声でばかりいわれたことに少しムツとする。

「おれはばかじゃない。天才だ！ ちなみにここに潜入したのは、それそうおうの理由があつてのことだ」

「それで、自称天才さんはどうしてここに侵入したんだい？」

おれが腕組みしてそう言っている間にライアンは先に木陰に座り、聞いてきた。

「ここって豪邸だろ。つまり生えている木とかもスゲエはずなんだ。だからここにいる虫もスゴイ！」

それにこの原っぱもつい寝ちやうぐらい良いし、と得意げにいい加えると、ライアンはきよとんとした顔をした後、あっはっはと、大笑いした。

「君って」

ライアンは息を整えて、

「やっぱりばかだね」

と言った。

2話

「君に会わせたい子がいるんだ」

何かを考えている素振りをしていたライアン急にそんなことを言い出した。どうやら話を聞いてみるにその子は病気がちで、あまり外に出ることができないらしい。

「いいのかよ。こんな初対面で君にだってあつたばかりだぜ？」

「急にまじめになるなあ、君」

いいからいいから、とおれの腕を掴んだライアンに連れてかれて豪邸の方に連れてかれる。そこまで言われたら断れないので、なすがままにされる。ふと上を見上げると少女が窓から外を見ているのが見えた。

「ねえ、ちょっと待ってあの子、もしかしてライアンが言ってた子？」

「あちやあ、やっぱりかあ」

頭に手を当ててそう言うライアンをほっといて、周りに手ごろな木が無いか探し始める。

「何してるのさ」

「要するにあの子を元気にさせればいいんだろ」

「まだ何も言っていないんだけど、」

困惑し止めようとしてきたライアンに任せとけつて、と言って宥めつつ木をするすると登ってく。ちょうど木の葉が生い茂っている場所の下に隠れたおれはガサガサと枝を揺らし、少女の気を引く。

「なんですの？」

「よし、気づかれてないな」

心の中でカウントを3、2、1と数える。一気に飛び出て驚かそうとした時に、おれが一匹だけ捕まえていたセミが虫かごの中で鳴き始める。

「まあ、ただのセミでしたか」

上からの声に内心ほつとしながら、出るタイミングを完全に失ったことに気づいて焦り始める。3秒間悩んだ末、今出ることにした。

「ばあああああ!!!」

ええい、どうにでもなれ! と心の中で思いながら飛び出す。反応は。と少女を見たらその部屋には少女だけではなく見知らぬおばあさんがこちらを見つめていた。

今、おれは正座をさせられたいた。おばあさんに見つかったおれはあの後、黒服のおっさん達にこの部屋に連れてこられた。目の前にはおばさんが、後ろには黒服が仁王立ちしている。いつの間にかいたライアンの方を見てみれば、ぷいっと目を背けられた。おばあさんが床を足で打ち鳴らす。ばんっ! という音が鳴る。体がびくっとなり、おばあさんの方に姿勢を正す。

「あなたがどうして我が邸宅にいらっしやるかはこの際不問にしますが、何故マックイーンを襲うような真似をしたのですか?」

「ライアンがそのマックイーンって子が最近元気ないって言ってたから、その元気を出してあげようとして、…」

ライアンの方を指さして口ごもりながら答える。ふふつと笑い声がしたので顔をあげたら、今までおばあさんに隠れていたマックイーンという子が口に手を当てて笑っていた。尻尾をゆらゆら揺らしおれの目の前まできたマックイーンは、手を差し伸べて立ち上がらせてくれた。

「もういいではないですかおばあさま。彼は私のためにしてくれていたようすし」

「マックイーンがそう言うのであれば、これ以上怒る必要もないですね」

おばあさんですが、と続けて

「君のご両親にはこのことをお伝えしなければなりませんね」

と言った。そしておばあさんが黒服のおっさんに何か指示をする。黒服のおっさんが渡したのは何かの紙だった。おれの目がぎよつと開く。もしやと思い、ズボンのポケットに手をつ突っ込んで動かすものもない。それはお母さんがおれが迷子になった時に困らないように持たせてくれた電話番号だった。

おれは母親が来るまでソファに座らせて待たせてもらえたけれど、気分はさながら死刑を待つ人のようだった。マックイーンは自分の部屋に帰ってしまったが、ライアンはおれを心配してかこの場に残ってくれた。

「トレーニングの途中だったんだろ。いいのかよ。続きをしに行かなくて」

「こんなことがあったんだし流石にやる気は起きないかな」
「そっか」

元気に話を続ける気分でもないので、一言二言交わしただけで口を閉じる。ライアンは急にそうだ！ と手を叩いた。

「明日もうちに来なよ。どうせ虫取りしかやることないんでしょ？」

「おれは天才だからな、そんな暇人じゃないんだ」

「じゃあその天才さんがしなきゃなんないことってなんなのさ」

「宿題とか、ケンちゃんと遊んだりとか、」

「十分暇じゃん。暇なときでもいいから来なよ」

「しようがないなあ」

はあ、とため息をつきながら答える。ちらりと窓の外を見ると空はもう夕焼けに染まっていた。

母親が来てからは時間が早く経って行った。家に帰ってからもこつてりと絞られたおれは疲れたのでベッドの上に寝っ転がる。ぼすんという音を聞きながら、ゆっくりと目を閉じようとすると、そこで日記のことを思い出す。面倒くさいのでこのまま寝てしまおうかと考える。でも一日かかないとどんどん面倒くさくなっていくなと考え直したたおれは机に向かった。

3話

がちちゃんという音とともに受話器を下ろす。

「マジかよ、い、」

次の日、ケンちゃんと遊ぶ約束をしていたおれはドタキャンの連絡にげんなりしていた。どうやら夏風邪にかかったらしい。昨日ライアンに暇な時に来ていいと言われたことを思い出す。だからだらと行く準備をし始める。リビングにかかっている時計を見ると今は9時。今から歩きで行っても1時間くらいかかるな。でもあつちに行つて何するんだ？

「ボードゲームとか持って行つてみよう」

思いつたつたらすぐ行動する。自分の部屋に駆け込み、お泊まりするときを使う大きめのリュックを引っ張り出す。その中にありつたけのボードゲームを詰め込む。少し入れすぎたかもしれないけれど、足りないよりはマシだろうと思つてリュックを背負う。

「鍵よし、水筒よし、帽子よし」

忘れ物をしないためには口に出して確認するのが一番とテレビで見たおれは出かける前にこれをするのが習慣になっていた。少し暑くなり始めた外に出て、家の鍵を閉める。よしメジロ家へと出発だ！

結局着いた頃にはおれは汗だくになっていた。昨日もそうだったけれど、今日は大荷物を持っているのでその分汗も多くかいてる気がする。やっこのことで門の前まで着くとどうやって入ろうかと考え始めたところ、どうやらインターフォンがついているようでそのボタン

を押して中に入れてもらうことにした。押してから数秒、インター

フォンから声がした。要件を聞かれたのでライアンに呼ばれたので来ました、と正直に答える。そうするとライアンお嬢様は今日は用事でいらつしやいません、と返ってきた。、今日用事があるのにそんなこと言ってきたのかよ。これからどうしようかと迷っていると、この暑い中いらつしやつたのにこのまま帰すのは失礼だ、と中に入れてくれた。

応接室に通された。案内してくれた人に聞いてみればライアンは午後には帰ってくるそうなので帰って来るまで待つことにした。それでも十分もしたらそわそわして落ち着かなくなってきた。よしここを抜け出してマックイーンの部屋に行ってみよう。幸い案内してくれた人はすでに戻っていったので、警備は手薄になっている。けれども建物の中だと迷いそうなので、昨日みたいに外から行こう。リュックを背負い、応接室の窓を開ける。開けた瞬間、外の暑い風が流れ込んでくる。それに少し躊躇するけど、思い切って外に出る。窓をゆっくり閉めて走り出す。記憶頼りにマックイーンの部屋を探す。幸い他の部屋と違い一部屋だけ窓が開けられていたためわかりやすかった。近くの木によじ登り、頂点までいくとマックイーンがベッドの上で本を読んでいるのが見えた。がさがさという音がなつてしまったのでマックイーンがこちらに気づく。わなわなと口が動き、何かを叫ぼうとしたので咄嗟に口に指を持って行って、シーと静かにするためのジェスチャーをする。ゆっくりと部屋の中に入る。

「何をしにきましたんですの?」

「暇だからな、マックイーンも暇だろうなって思つて遊びにきた」

リュックを下ろして、中からボードゲームを取り出しながら答える。マックイーンに何やりたい? と聞いたらオセロを指さしてきたので準備をする。どうやらやったことがないらしく、おれが準備をするのを不思議そうに見つめていた。こういうゲームは自分で試行錯誤するのが面白いのでコツなどは教えないでルールだけ教える。おれは友達のカンキチにボードゲームの支配者と言わしめられたほどの実力なので、1勝、2勝と勝利を刻んでいく。マックイーンは負

けず嫌いらしく、何度も再戦をせがまれた。他愛のない話をしながら勝負を続けていく。5戦ほどしたところでコツを掴んだらしく、急に強くなった。10戦目にしてマックイーンは1勝を手にした。

オセロに一区切りがついた頃にはもうお昼になっていたらしく、マックイーンのお付き人でのじいやと呼ばれている人が入ってくる。どうやらお昼ご飯の時間らしく、おれもリュックに入れていたおにぎりを取り出す。おにぎりにかぶりつきながら運ばれてきた食事の方を見る。

「いつも食事はここで食べてるのか？」

「体調が良い時は家族と一緒に食べていますが、ここ最近は一人ですわね」

「、、一人で食べてて寂しくないのか」

「あら、心配してくださいるんですの？」

でも、とマックイーンは続けた。

「今日はあなたが一緒にいますから寂しくありませんわ」

そう言って微笑むマックイーンを見て、少し顔が熱くなり、こそばゆい感覚に襲われる。咄嗟に顔を見られないように逸らしたら、照れていますの？とマックイーンがからかってきたので、違いやいと否定する。おにぎりを食べる速度も速くなった気がした。

4話

お昼ご飯を食べた後、マックイーンとまたオセロをしていると部屋のドアが開き、あ——っ!! という声とともにライアンが入ってきた。おれの方に詰め寄ってくる。そんなライアンを無視して盤面の方に視線を戻す。ちらりとマックイーンを見ると、自分の番で集中しているのか全くライアンに気づく気配がない。代わりに、真剣勝負をしているから静かにしてくれと伝えると少ししよんぼりしてマックイーンの隣に座った。マックイーンとおれがオセロを置く音だけが鳴り響く。いつしかライアンも黙り込んで集中していた。最後の一手を置いて、自分のオセロの数を数える。結果は1枚差でおれの勝ちだった。うおっしやー! と言つて、ガッツポーズをして後ろに倒れる。

「マックイーンもまだまだだな」

「つ、次こそは、、！ 勝ちますわ!」

「ねえくもつと違うのやろうよ」

「それもそうだな」

リュックを漁り、ウマ生ゲームというボードゲームを出し二人の目の前に置くと二人して不思議そうな顔をして覗き込んだ。

「なんですのこれ?」

「すぐろくだよ」

おれが持ってきたのは日本のトレセン学園公式で商品化されてるトウインクルシリーズを自分がウマ娘になってかけていくシナリオだ。みんな準備しながら簡単なルール説明をする。そして最後に駒をスタートに乗せてゲームが始まる。じゃんけんをして順番を決める。最初はおれだった。

このすぐろくは基本的にトレーニングマスと怪我マス、そしてお出かけマス、レースマスで構成されている。1から10まであるルーレットを回す。出たのは4だった。ルーレットに従って駒を進めて

いく。

「げ。さっそく怪我マスかよ」

「確かこうなったら、負傷カードをランダムで取るんだっけ」

はい、とライアンが負傷カードの山札を渡してくる。おそろおそろ引くと「夜更かし気味」とあったのでほっとする。まだ挽回はできそうだ。

「次はわたくしの番ですわね」

「マックイーンは何を目指すんだ？　すぐろくだからG1のレースしかないけどさ」

やっぱ王道のクラシック三冠かなと思っていると、マックイーンが急に立ち上がり大きな声で叫んだ。

「メジロのウマ娘として天皇賞は外せませんわ！」

食い気味に迫られる。引き気味にそうか、と答えたおれに気づいたマックイーンはこほんと咳払いをして、改めてルーレットを回した。

すぐろくも中盤に入り、クラシック級の5月に入った。おれ4月の皐月賞を勝ち、三冠の第一歩に入ったところだった。マックイーンは天皇賞が重要だからとレースを回避している中、ライアンはトレーナーと恋愛を繰り広げていた。このすぐろくにはなんであるのかはわからないけど、通常のすぐろくのコースに加えて恋愛イベントが盛り沢山のコースがある。ライアンはすぐろく序盤でこのコースに捕まってしまい、まだ抜け出せずにいた。

「ライアン、お前いつまで恋愛しているんだ？」

「だってトレーナーが『お前がレースで負けるのを見たくない』って言うって元のコースに戻させてくれないんだもん」

「最後のマスでルーレット回して5以上出すだけだぜ？」

またしても5未満の3を出して耳が垂れて、涙目になっているライアンを結局は運だからなとだめつつ、自分の番になったのでルー

レットを回した。

そして今、マックイーンが目指した天皇賞・春のマスに皆の駒が止まっている。シニア級の最初にやっと恋愛コースから抜け出したライアンも一緒だ。

「マックイーンだけじゃなくてライアンも天皇賞に出るんだよな？」

「もちろん。なんとたつてメジロ家の悲願だからね」

「あなたはできますの？」

「いや、おれはクラシック三冠とつたから出なくていいかな」

レースマスでレースに勝つのは単純で、ただマスに書いてあるルーレットの出目以上の数を出せば良い。ただ、天皇賞・春の勝利条件はルーレットででる最高の10を超えているから普通にやったら勝てない。そこで重要になってくるのが、今まで止まってきたトレーニングマスや怪我マスだ。トレーニングマスを何回止まったかで勝利条件の難易度が下がり、怪我マスに止まった時に引く負傷カードを何枚持っているかで難易度が上がる。

そして今回マックイーンは難易度大幅に下がり、6以上を出せば勝て、ライアンは厳しいけど最高の10を出せば天皇賞に勝てる。

1つのレースに2人以上が出た時でも勝てるのはやっぱり一人で、これは出目が大きい方が勝つ。

「う、うそですわ。わたくしが負けてしまうなんて、、」

「大どんでん返しじゃん。すげえ、、！」

「愛の力は最強だね！」

結果はマックイーンが9、ライアンが10だった。マックイーンが回し、9を出してさつきまでどや顔をしていたのが思い出されるのに対して、今のマックイーンは耳や尻尾が垂れ、今にも泣き出しそうな雰囲気を出していた。ライアンに対してかけた言葉と同じように、これも運だからだと慰める。

すぐろくで全員ゴールまで行き、戦歴はおれがクラシック三冠を獲った3戦3勝で、マックイーンは天皇賞・春を落としたが、その後の天皇賞・秋では勝利して3戦2勝。ライアンは天皇賞・春は奇跡の勝利をしたけど、天皇賞・秋ではマックイーンに負け、2戦1勝だった。そしてすぐろくを終えたおれにはある思いが芽生えていた。

「おれ、トレーナーになりたい。トレーナーになって君たちを勝たせたい」

いつの間にか立ち上がって、気がつけばそんなことを口に出していた。今思えば、ウマ娘のレースへの思いを直接聞いたのが初めてだったからかもしれないけど、その時のおれにはどうでも良いことだった。呆然としている2人を前にして急に小つ恥ずかしくなったおれはリュックを掴んで立ち上がり、持ってきたものを片付けずに別れの挨拶だけして逃げるように帰っていった。

おれの目標はトレーナーになって、マックイーンたちを勝たせるになった。

5話

次の日、さつそくエレベーターになるためにはどうすれば良いのか探すために図書館へ行つて、本を探すことにした。この町にある図書館は家から10分もかからない距離にあつて、こちら辺の地域の一番大きい図書館だ。いつもの通り水筒を持って家を出る。歩いて行くつもりだったのに抑えきれない気持ちが見えたのか、いつの間にか早足になり、結局は走つていた。

図書館について中に入ると、外と違って冷房が効いていて涼しい。ベンチに座つて少し休憩してからエレベーターになるための本を探すことにした。階段横の表を見ると、どうやらスポーツについての本は3階にあるようで、階段を上つていく。3階についたおれは早速エレベーターについての本を探すことにした。歩き回つてウマ娘のジャンルの本だなを探す。こうして探していたけれど、エレベーターについての本は全く見つからなかった。そこで検索用のコンピューターがあつたことを思い出して、そちらの方へ向かう。途中の読書スペースで、山積みの本に囲まれている人がいたので気になって、ちらりと見ると本の題名の中にエレベーターという単語が入つていることに気づいた。ここが図書館の中であることを忘れて駆け足でその人の方へ向かう。

「ねえ兄ちゃん。それってエレベーターの本？」

そう質問するおれに気がついたので、手を止めて顔をあげてこちらを見た。そうだよと答えた後、視線を戻した本を読み始めた。ここにある本、おれも読んでいい？ と聞いたらその兄ちゃんはどうもいなかったので、一番上にある一冊を取り、隣に座つて読み始める。読み始めたは良いものの、専門用語や文自体の難しさになかなか四苦八苦していたところ、隣で読んでいた人はそれに気づいたのか、ぱたんと本を閉じこちらに向いた。

「君、トレーナーになりたいのかい？」

「そうだよ。兄ちゃんも？」

「僕は、、そうだね。なりたいたいというよりも、ならなくてはいけないという感じかな。、、そんなことよりも、その本を読むのはなかなか大変だろう。君にはこつちを読んだ方がいいと思うよ」

そう言つて山から引つ張り出したのは『猿でもわかる！ トレセントレーナー入門！』という本だった。

「これは良い本だね。他の本では解説されていない単語が全て書いてあるから、まずはこちらを読んでみてほしい」

じっくりと読んできてね。と付け加えられた言葉とともに渡された一冊を抱き締め、ありがとうという言葉を書いて本を借りるために受付へと走つて行つた。

今日はマックイーンに会うために、メジロの家に来ていた。マックイーンの部屋に通されると今日も彼女はベッドの上に寝込んでいた。ベッドのそばに来てマックイーンの体調を聞く。どうやらこの暑い夏の間は病弱な彼女を心配して両親やおばあさんが外での運動を禁止しているらしい。だからこの前も一人で外をずっと眺めていたんだな。

「マックイーン。一人でずっとここにいてつまらなくないのか？」

「ここ数年間、夏は毎日をごのようにして過ごしていたのでほんの少しだけ寂しい日もありましたわ。ですがここ最近、あなたが来てくれているので退屈しませんわ」

今日こそはオセロで勝たせてもらいますわ、とおれがこの前置いてきてしまっていたオセロ盤を取り出しそう言つておれとマックイーンの間で置く。最初の4枚を置き、順番を決めてゲームがスタートした。

「この前、あなたトレーナーになるとおっしゃられていましたけれど、それはどうなりましたの？」

「今、勉強中だぜ。図書館で優しい兄ちゃんに会ってさ、おれでもわかりやすい本を教えてくれたんだ」

そうですか、と言って角に2つ目になるオセロを置く。思わず口からああっという言葉が漏れ出る。マックイーンが口到手を当ててふふっという笑い声が出る。ていうかいつの間にか強くなつたんだよマックイーン。ボードゲームの支配者と言われたおれをいとも簡単にここまで追い詰めるなんて。

「マックイーン、あの後オセロめちゃくちやしたな？」

「朝昼晩。あなたが帰ってから毎日しましたわ。対戦相手はライアンやじいや、最後にはおばあさまさえ。特にライアンに関してはもうオセロは嫌だと言わせるまでやり続けましたわ」

自慢げに話すマックイーンに対してライアンがかわいそうだなという感想を抱く。これはもう片手間にできるような問題じゃないな。本気を出すしかない。ボードゲームの支配者を舐めるなよ、、、！

結局ギリギリのところまでマックイーンに負けてしまったおれは久しぶりに悔しさを感じた。おれに勝ち上機嫌なマックイーンが笑顔でもう一戦とせがんでくる中、本気を出した以上負けてられないと気合を入れてオセロに臨んだ。

6話

——負けた。完敗だった。おれはマックイーンに20枚もの差をつけられて負けてしまった。マックイーンを見ると勝ち誇った顔をしていた。

「く」

「く?」

「くっそおおお!!」

「お、お待ちをなさい!」

あまりの悔しさに部屋を飛び出して脇目も振らずに走った。

「どこだ(ん)ん?」

走り続けた結果、ここがどこか分からずに迷ってしまった。階段は上り下りしてないからここはマックイーンの部屋と同じ階のはずだ。このまま帰るつもりだったおれは外に出るために階段を探すことにした。

目の前から誰かが走ってくるのが見える。ものすごい速さだ。徐々に姿が大きくなっていき、少女の姿となる。頭の上についた耳、ゆらゆらと揺れる尻尾をみるにどうやら彼女はウマ娘のようだ。

目の前で急停止すると、おれの手を握ってきた。

「君! ちょっと私と一緒に隠れてくれない!」

「うわあっ!」

まだ何も言っていないのにウマ娘の強い力で引っ張られる。近くの部屋に入ると、物置部屋のようにメジロ家なのかと思うほど、ここは狭かった。

彼女の方が少しばかり背が高いため、両腕で抱きかかえるようにされる。額に吐息がかかり、ほのかに顔が熱くなるのを感じた。対して彼女は扉の方をずっと注視している。

「ねえ、誰から逃げてるの？」

ふと、彼女に聞いてみる。

「静かに、来るよ」

壁に耳を貼り付けた彼女は、誰かが来るのを感じたようでじっとしている。数分間じっとしていると、危機は通り過ぎたようで彼女がホツとため息をついた。気が抜けた瞬間おれを強く抱きかかえてことに気がついたのか顔がにわかに赤く染まる。

「えっと、ゴメンね、その、強くしすぎちゃったみたいで。」

パツと抱き抱えていたのを離れて廊下へと出る。

「ところで君、どうしてこんなところにいるの？」

「ここって広いだろ、それで迷っちゃって」

「それならあつちに階段があるけど。」

あちらの方を指さして彼女は言った。これでやっと家に帰れる。

「ありがとう！．．えっと」

お礼を言おうにも彼女の名前を知らずに戸惑っていると彼女の耳が何かに気づいたようにピクリと動く。

「パーマ。メジロパーマだよ」

「ありがとう。パーマ。それじゃあ」

もうどのくらい時間が経ったのかもわからない。あまりに家に帰るのが遅れるとまたお母さんに怒られるかもわからない。

階段へと向かって急いで走ろうとすると、後ろから引っ張られて尻もちをつく。

「まだ私、君の名前教えて貰ってないんだけど」

そういえばそうだった。早く家に帰ることに気を取られてパーマーに名前を教えるのを忘れていた。

「田中」

「え？」

「田中だって。俺の名前」

きよとんした顔をしたパーマーに再度自分の名前を答える。

「それって苗字でしょ？ 私が聞いているのって下の名前の方なんだけど。」

困ったような顔をして再度聞いて来たパーマーにバツの悪い顔をする。

言いたく無いものは言いたくない。ライアンにだっておれの名前は教えてないのだ。

「いやだ。絶対に言わない」

「なんでそんなに頑なに言わないのさ」

「自分の名前が嫌いだから」

その場で体育座りをして、うずくまる。

——この始まりは保育園に入った時だった。小さい頃のことあまり覚えてない。けれど一つだけ覚えていることがある。友達に言われたのだ。

小学校でもそうだ。名前のせいでみんなからはからかわれた。母

さんは父さんがつけてくれた大事な名前だなんて言うけれど、おれにはそうは思えなかった。

だから嫌いなんだ。

パーマーが隣に座る。手遊びをしながら少し悩んで、決心したように口を開いた。

「私にもね自分の名前が嫌いだって言う妹がいるの。その娘はメジロドーベルって名前のウマ娘だけどね」

残酷だよ、とパーマーは言う。

「この名前って別世界の魂が宿ってるんだって。だから私たちの名前にはお父さんやお母さんの想いはこもってない。たくさん愛されてるけどね」

——だから君の名前は大切にしたい。

そうパーマーは俺の目を見て言った。そうか。君たちウマ娘にはそんな事情があったんだ。

「道真。俺の名前は田中道真って言うんだ」

父さんがどんな想いでおれにこの名前をつけたのかはわからない。けれど。この名前を誇る気持ちにはなれた。

「ありがとうパーマー。おれ、自分の名前を誇れるようになる」

どういたしましてと返すパーマー。少しばかりかすつきりとした気持ちになったところで、急に家に帰ることを思い出す。

やばい早く帰らないと……！ となっているところに、パーマーがもう遅いから家の車で送ってあげるよと言ってくれた。

パーマーが執事呼んで、来たのは怒り心頭を通り越して呆れている執事だった。そこは後でこっぴどりと怒られることで決着はつき、その執事の人——大久保さんが車を運転してきてくれた。車に乗って

そのままお別れかと思いきや、パーマーも乗ってきて驚いた。

パーマー曰く、二人だと心配、だそうだ。

車から見る慣れない夜の景色に目を奪われながら、パーマーからメジロドーベルの話を聞いた。車が家につき、パーマーと別れる間に彼女から明日、メジロドーベルと会ってみないかと提案をされた。

「わかった。明日行くよ。パーマー」

「待ってるよ道真」

じゃあまた明日と約束をかわし、家の中に入った。

そうだ、お母さんに俺の名前の由来を教えてもらおう。

7話

玄関の扉を静かに閉める。こんな夜遅くになったんだからお母さんはかんかん怒ってる筈だ。バレないように静かに廊下を歩いてリビングのドアを少し開けて、覗き見る。

そうするとお母さんはリビングの椅子に座っていた。テレビもつけていなかったたので、テレビ好きのお母さんからしてみればとても不気味に思えた。

怒られるのがわかっているので、出来ればリビングを通りたくない。けれどリビングにおれの部屋への階段があるので入るしか無かった。

きいーつと何か引つ掻いたような音を出してドアが開く。お母さんはおれに気づいたようではつとこちらを見る。

怒鳴られるだろうと目をぎゅつと閉じると、次の瞬間おれは抱きしめられていた。

「こんなに夜遅くに帰ってきて！ 心配したんだよ!？」

「ごめんなさい」

どうやらもう少しで大事になるところだったらしい。お母さんに怒られることが多いおれだけでも、こうやって泣いているお母さんは初めてみたような気がした。

「ねえお母さん、おれの名前ってどういう意味なの？」

「わからない。わからないんだアンタの名前の意味。あの人——アンタのお父さんがさ勝手に名前決めてさ、アタシに意味も教えてくれないでどっか行っちゃったのさ」

父さんがおれが小さい頃にどっか行ってしまったのは知っていたけれど、名前の意味も教えてくれなかったなんて初めて知った。

「——でも、あの人は自分の息子のことをしっかりと考えている人だったから心配しなくて大丈夫」

そう言われて頭を撫でられる。

「お腹も空いたでしょ。ご飯にするよ」

次の日、メジロ家へ行く前に図書館でまたトレーナーの本を借りることにした。家に帰ってから読み続けた本を持ち、また図書館へ来た。3階に上がり、読書スペースに来るとこの前と同じようにその人は山積みの本に囲まれて本を読んでいた。あちらも気づいたようである。読む手を置いてこちらを向く。

「どうだったかい。小学生の君でもわかりやすかっただろう?」

「はい! それで、次はなんの本を読むのが良いんですか?」

そうだねえ。としばらく考え込んでから、その前に少し話をしようかと言って、おれの手を掴み受付まで連れてきた。そして受付の女の人と何かを話し込み、会議室に連れてきた。そしてお互いに椅子に座り、その人はこちらへと視線をしっかりと向け口を開いた。

「この前、君はトレーナーになりたいと言ったね。なら今日は理由を聞こう。教えてくれるかい?」

この人がおれにトレーナーになりたい理由を聞き出したいのはわかかった。けれどおれのトレーナーになりたい理由を聞き出してどうするのかまではわからなかったため、とりあえず答えることにした。「おれ、ウマ娘の子と友達なんだ。その子は病弱だから、あまり走れないんだ。けれど、それなのにレースに対する熱意は持っていたんだ。勝ちたいという気持ちは誰にも負けてなかった。だから、勝たせたいと思ったんだ」

無言で噛み締めるようにして聞いていたその人はそうか、とだけ答え、黙り込んだ。しばらくした後何かを決心した顔持ちになった。

「なるほど。だが君はその子をトレーナーとして勝たせることはできない」

今この人はなんて言った? おれはトレーナーになれないのか?

なんでだ? おれのトレーナーになりたい理由がダメだったのか? 考えたことがそのまま口に出る。

「理由がダメなんですか? 勝たせてあげたいという理由だけじゃダメなんですか!」

「いや、君はトレーナーになれるさ。君にもわかるように説明しよう。」

このまま君がトレーナーになるための勉強をしてトレーナーになったとして、小学生の君では最低でも10数年。そのウマ娘の子は君と近い年齢だろう。そしてその子がレースで活躍するのが数年後。トレン学園は中学生から入れるからね。そうすると君がどんなに努力してトレーナーになったとしても、その頃には君が勝たせたい子はおそらく引退している。もししていかなかったとしても担当にすることはできない」

引退している。勝たせられない。その事実を知って、悔し涙が出る。そうか。だめなんだ。昨日パーマーにも自分の名前が誇れるようになるって約束したのにな。涙が溢れ落ちる頬におもむろにハンカチが添えられる。思わず顔を上げるとその人が優しい顔をしてこちらを見つめていた。

「ここからが本題なんだよ。君がトレーナーになったとしても夢は叶えられないことは言ったね？」

それにうなづく。

「いいかい。ウマ娘、彼女たちを支える人間は大部分はたしかにトレーナーという職業だろう。しかしその他にも彼女たちを支えている人間は数多くいる。栄養士や医師、それに応援してくれるファンだっている。その人々が彼女たちを勝利へと導いている。そして君だっただけだ。トレーナーとして彼女たちを支えるだけが勝たせることには繋がらない」

そのことを言われてハツとした。

そうか。おれ、あいつらの友達なんだ。友達として、おれにもできることがあるはずなんだ。

「兄ちゃん、ありがとう。おれ、トレーナーとしてじゃなくてあいつらの友達として頑張ってみるよ」

そう言って拳を突き出す。兄ちゃんは最初きよんとしていたけど意味がわかったのか、拳を突き出して重ね合わせた。会議室の出口に向かい、扉を開けた。

8話 ※修正版

メジロ家の使用人にパーマーに招待されたと言うと、この前のように応接室に案内された。少しばかり待っているとパーマーが入ってくる。おはようと挨拶をされたのだけれど、おはようと返すのはなんだか小っ恥ずかしいのでおう、と返したら挨拶はしっかりしなきゃダメと怒られた。

「メジロドーベルにはおれのことって話してあるの?」

「同じ名前を嫌っている者同士とは伝えただけど…」

「おれはもう自分の名前から逃げないって言ったじゃん」

鼻息を荒くして答えると、そうなんだよねえ、とパーマーが悩ましげに答えた。今のおれは名前を克服とまではいかないものの、向き合い始めているのだ。

そのことをメジロドーベルが知ったらどうなるのだろうか。一人だけ克服しやがってと嫌われるのだろうか。そのことを考えると身震いがする。

「やっぱおれ、帰ろうかな」

おれがこんなことを急に言い始めたので、ええ!? とパーマーが困ったように言う。

「あの娘君に会えるの楽しみにしてるんだよ?」

それに道真の名に恥じないんじや無かったの? と追い討ちをかけられたので、すっかり逃げ道はなくなってしまった。なんやかんやと言っている内にメジロドーベルの部屋に着いたようで、パーマーがドアをノックした。はい、と声がして、どんどんとドアに足音が近づいてくる。こうなってしまうてはしょうがない。腹をくくるしかない!。男道真、行きます!!

どこか緊張感を持った面持ちで部屋に入ると、幼く可愛らしい少女

がドアノブを掴んでいた。

「君が、メジロドーベル？」

「はい．．！ あなたがみちぎねさんですね？」

嬉しそうな面持ちでおれの手を握ってくるドーベル。まだこの娘がおれが自分の名前を嫌っていると信じているのを考えると、罪悪感で心がざわついてくる。純粹な目で見られていられなくなつてパーマーの方を横目で見ると、にこにここと笑っていた。

「さあこちらへ！ と引つ張られたおれは椅子へと座らされていた。向かいにはドーベル。隣にはパーマーが座る。」

「みちぎねさんて、なんでご自分のなまえがおきらいなんですか？」

とりあえず落ち着こうと思つて紅茶を一口飲んだところに、いきなりこの話の本題のことを聞いてきたため、驚いて吹き出しそうになる。それをこらえて飲みこむと気管支に入ったのか、咳き込んだ。

「大丈夫ですか!？」 と近づいてくるドーベルを手で抑えて、話を続ける。

「君はどうして自分の名前が嫌いなの？」

「まず私って可愛いじゃないですか」

ドーベルは胸に手を当てて得意げに答えた。たしかにメジロドーベルは可愛い。けれどもそれを自分で言うのか？ ちよいちよいとパーマーに手招きされたので顔を近づける。

「ドーベルっていつもあんな感じなのか？」

「ドーベルのお父さんがね．．いつも可愛い可愛いって言うからあの子すっかりそれが自慢になっちゃって」

「もしかして、ドーベルのお父さんって親バカってやつ？」

「ま、まあ．．．」

パーマーは苦笑いをしてはぐらかしているけれど、その事がもう肯定しているようなものだぞ。ドーベルの方へ視線を戻すとジト目はこちらを睨んでいた。

「そこ、なにコソコソやってるんですか？」

「なんでもないっ、なんでもないよ」

パーマーが慌てて手を振って否定する。それに対してドーベルに数秒間睨まれたが、まあいいです、と気を取り直して話を続けた。

「でもドーベルって名前が可愛くないんですっ」

ばんつと机に手を叩きつけてドーベルはそう叫んだ。そうか。けれど、パーマーの話を聞いたおれはそこまで名前のことを嫌う必要がないとわかっていた。その事を口に出そうとして、昨日のことを思い出して口を閉じた。

『この名前って別世界の魂が宿ってるんだって。だから私たちの名前にはお父さんやお母さんの想いはこもってない』

無理に名前に縛られるなんて言うのは簡単だ。けれどそれで彼女のコンプレックスが拭えるとは思えない。コンプレックスは他人から見たら大した事ではなくても、自分にとっては酷く気にしている事だったりする。

「私のことは話しました。それで、みちぎねさんがご自分の名前を嫌っている理由はなんですか？」

「おれも自分の名前が嫌いだった、——つい昨日まではそうだったんだ。けれど、パーマーの話を聞いて自分の名前も悪くないと思えるようになった。君がいつの間にか自分の名前を」

——悪くないと思えるように。と言おうとしたところで、言葉を遮るようにドーベルが大声で泣き始めた。

「私、みちぎねさんが、私と一緒に自分の名前が嫌いだからってお呼びしたのに。！」

ドーベルが目の前で泣き始めてしまったことにパーマーと共々驚いてオロオロしていると、不意に部屋のドアがバンッと開かれ、大男が飛び込んできた。

「誰だア！　うちの娘を泣かせたヤツは!!」

「ヤバっ！　ドーベルのお父さんだっ！」

あの太男がドーベルのお父さん!?　聞き返そうとしてパーマーの方を見ると既に逃げようと窓の方へ向かっていた。パーマーめ！　逃げ足だけは速いな！　と思いつながらおれもパーマーの方へ逃げよ

うとする。がしかし現実是非情で、ウマ娘のパーマーと違って人間のおれは大男からは逃げられなかった。

「貴様かつ！　うちの娘を泣かせたヤツは！」

逃げ損なった俺の足を掴み振り回す。グルングルンと回る視界はさながら絶叫アトラクションのようでとても怖かった。そのまま部屋のベッドに叩きつけられる。あまりの衝撃に少しぼーっとしたけれどすぐにドーベルのお父さんのことを思い出して、そちらの方を向くと必死にドーベルのことを宥めている最中だった。

今さら逃げる気にもなれないので諦めてベッドの上に寝転がっていると、足を吊り上げられるようにしてドーベルのお父さんの肩に担がれる。

「少しばかり付き合ってもらおうか」

連れてこられたのは、床一面に畳が敷き詰められたところだった。そこに落とされるように下ろされて、いてつと声が漏れる。

何をされるのかと思ってドーベルのお父さんを見上げると、おれの目の前にあぐらをかいて座った。

「ア、アンタ、おれをこんなところに連れてきて、いったいどうするつもりなんだつ?!」

「先程はすまなかった」

ドーベルのお父さんの眉間に寄っていたしわはいつの間になくなっていて、いつの間にかその人に頭を下げられていた。

「いったいどういことなんだ!?!この人は怒っていたんじゃないのか?」

「アンタは怒っていたんじゃないのか?… んですか?」

「たしかに私は怒っていた。君を投げたのも事実だ。しかし今は後悔している」

「… 後悔するくらいなら、最初からやらなきゃいいじゃないか」

「そもいかないさ。私はドーベルの父親だ。そして君はうちのドーベルを泣かせた。だろ?」

「・・・」

「なあ、理由を教えてくださいませんか？ドーベルはなんで泣いていたんだ？それを教えてくれなければ私は君を叱ることすら出来ない」

「それは・・・」

この人に教えていいものなのだろうか？名前はその人自身にとつて強さにも弱さにもなる。ドーベルはおれよりも幼く、弱い。精神的にだ。わからない。おれの中でこの人のことを信じて話したいという心と、まだ信じることが出来ない心がせめぎ合っていた。

「その顔を見るとどうやら聞くのは無理な様だな」

「・・・ すいません。アナタに話すことは出来ない・・・ です」

「いやいいさ。どうやらその事は君にとつてとても大事な事らしい」

どうしたものか。と言つて、ドーベルのお父さんはあぐらを解いて後ろへ大の字にして倒れ込んだ。

「人生には転機が訪れるのを君は知っているかな」

「てんき？ですか？」

「そう。 転がる機会と書いて転機。これは1回や、2回。人によつてはそれ以上の回数訪れるという。かくいう私もその転機が訪れた一人だな。それを持ってきてくれたのは私の妻なんだ」

「そう、なんですか？」

「私は幼い頃から親父殿に厳しく鍛えられていたから女性と接する機会が無くてね。・・・ もちろん母親も例外じゃない。そして大学を出て、私に縁談の話が舞い込んできた。親父殿が持ってきた話だ。そこで私は女性と初めて面と向かつて話せると知つて喜んで受けたんだ。しかし・・・ 俺は長年女性から離れて過ごしていたからか・・・ 簡単に言うと、女性と上手く喋ることが出来なくなっていた。何をしても改善出来ず、縁談は何度も破談。噂は広がりいつしか俺に来る縁談は無くなつていた。親父殿は怒り。跡取り息子として情けない限りさ。そこでだ。彼女と出会つたのは」

「それが、アナタの転機」

「そう。俺がこうなつてしまうのを苦しんでいたのを気づき、怖がるのではなく、逆に笑い飛ばしてくれた。救われたさ。こんな俺でもい

いと気付かせてくれた。まあ、今も諦めずに改善に挑戦し続けているけどね」

周りからしたら大したものではなくても、本人にとっては心の奥底で苦しんでいることもある。そういう人の弱さをこの人はわかっているんだ。この人ならドーベルの悩みを喋っても良い気がする。

「…ドーベル、ちゃんの悩みは彼女の名前のことなんです」

おれのこの一言を聞いた瞬間、ドーベルのお父さんは寝ていた体を起こして腕を組み、何か考え始めた。

「…そうか…名前か…でもドーベルが君の話聞いて大泣きしていた所を見るにドーベルの転機は君でもパーマーちゃんでも私でも私の妻でもない未来の誰かってことだ」

「じゃあ…？」

「まあ、放っておくしか無いな」

話が一段落着いたところでこの部屋の扉が大きな音を立てて開かれた。驚いて扉の方を向くとメジロのおばあさんと汗だくのパーマーが立っていた。

おばあさんはドーベルのお父さんの方に、パーマーはおれの方に近づいてきた。

「道真、大丈夫？」

どうやらパーマーはドーベルのお父さんがおれを連れていったのを見て心配しておばあさんを連れてきてくれたらしい。

「このとおりピンピンしてる」

元気なことを示すために両腕をブンブンと回す。それを見てパーマーはホッとしたようで、額の汗をハンカチでふき始めた。

「パーマー。私はこの方とお話がございます。そこな少年を連れて暇でも潰していらいっしやいな」

こちらに顔だけ向けたおばあさんは凜とした声でパーマーに言う。初めて会った時と同じように向き合っただけで緊張する。それはパーマーも同じよう元気よく返事すると、おれの手をとって急ぎ足でこの部屋から出た。

「やっぱり怖いな、メジロのおばあさん」

「怖いなんてもんじやないよ…！私、まだ慣れないんだから」

「ていうかどこに連れてくんだ？」

「とりあえず屋敷から出て…そこからてきとうに？」

「てきとうって…」

…これからどうするか。パーマーを置いておれだけいま帰るつてのもあれだし、マックイーンの部屋にゲームボードは置いてあるけど寝込んでたら悪いしなあ。

…あ。

「パーマーの走りを見せてくれよ。おれ、今までテレビでしかウマ娘の走りを見たことなかったんだよ」

「ええー。やだよー」

「いいじゃないかよ。けち」

「…じゃあ、少しだけね」

「よっしゃ！じゃあ今すぐ行くこうぜ！」

「道真は先に行つて！私、準備とかあるから！」

そう言つて走り去つて行くパーマーよりもおれは走りを見れることに気を取られていた。間近で見ると走りつてどういうもんなのかなあ。ワクワクが止まんないぜ！おれは興奮のままにレース場へと向かった。